
カエサルと海賊

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カエサルと海賊

【Nコード】

N6029Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

カエサルは若い頃海賊達に捕まったことがあった。その時の彼の取った行動とは。実際にあつた若き日のカエサルの逸話をアレンジして書いた作品です。

第一章

カエサルと海賊

ユリウスⅡカエサルの若き日のことである。

彼は若い時には民衆派と元老院派の対立に巻き込まれていたのだ。元老院派の領袖はスツラという。あまりよくはない身分の男だがそれでもだ。その冷静沈着な性格と類稀なる決断力、それにその巨大な資質によつてだった。彼は瞬く間にその元老院派を動かしローマに絶大な影響力を持つまでになった。

カエサルは民衆派だった。だからスツラにも元老院派にもよく思われていなかった。それで身を隠す為にロードスに留学することにしたので。

当時この島は学問の先進地域であった。彼は身を隠すのと共に学びそこから多くのものを身に着けようとしていたのである。

その為にロードスに向かう。しかしだった。

海においてだ。彼の乗る船が不幸に遭ったのであった。

気付けば周りにだ。怪しい船が集まりそこから柄の悪い男達がやって来る。彼等が何者なのかは言うまでもなかった。

「さあ、逃げるなよ」

「逃げれば容赦しないぞ」

「いいな」

「海賊か」

カエサルはその彼等を見て言うのだった。

「貴様等、そうだな」

「ああ、そうだよ」

「その通りだよ」

「俺達がそれだよ」

「わかってるじゃねえかよ」

「ふむ、それではだ」

カエサルは彼等の話を聞いてだ。あらためて話した。

「貴様達の目的は何だ」

「何だつて。まずはこの船にある金目のものは全部貰うぜ」

「それで手前等をタテに身代金を貰うんだよ」

「それに決まってるじゃねえかよ」

「それがわからねえっていうのかよ」

「そうだろうな。海賊ならな」

カエサルはそれを聞いてまた言うのだった。

「それは当然だな」

「わかつてるのか？こいつ」

「身なりがいいところを見ると貴族みたいだな」

「船はローマのものだし」

「ローマのお貴族様か」

「如何にも」

その通りだとだ。カエサルは胸を張って答えた。

「私の名前はカエサルという」

「ふうん、カエサルねえ」

「それが手前の名前か」

「一応覚えてぜ」

「ガイウス・ユリウス・カエサルという」

その名前もついても話すのだった。

「わかったな」

「そこまで言わなくていいけれどな」

「わかつてるからな」

「そこまではな」

「そうか。だが私の名前は覚えてな」

カエサルは海賊達にそのことを確認させた。

「わかったな」

「ああ、わかったよ」

「しかし貴族ならな」

「身代金は期待できるな」

「そうだな」

海賊達はそのことは確かだと言っただった。そうしてだった。

どれだけの金額を要求できるか。カエサルの前で話すのだった。

「これだけじゃないのか？」

「いや、これ位だろ」

「もっと安いものだろ」

「なあ」

「何だ、その金は」

しかしであった。カエサルは彼等の話を聞いてだ。口を尖らせて

こう抗議してきたのだった。

「安いにも程があるぞ」

「おいおい、人質が言うのか」

「そんなこと言うのか」

「一体な」

「私の価値はそこまで安くはないぞ」

これがカエサルの主張だった。

第二章

「もつとだ。もつと高い」

「高いっていうのかよ」

「じゃあどれ位なんだよ」

「一体」

「これだけだ」

カエサルがこう言って出してきた金額は。かなりのものだった。

それを聞いた海賊達はまずは目を丸くさせてだ。驚いた顔で言うのだった。

「おい、幾ら何でもそれはないだろ」

「それだけ出すっていうのかよ」

「御前一人に」

「そうだ」

カエサルは胸を張って言い切る。

「その通りだ」

「随分ふっかけるな」

「っていうかこいつそんなでかい家の人間なのか」

「そこまで出せる位にか」

「家についてはその通りだ」

実際彼は傍流ではあったがローマの名門の家の出だ。貴族の中でもかなりのものだったのだ。

「そしてだ」

「そしてかよ」

「今度は何だつてんだよ」

「私自身の資質がだ」

これについても言うのだった。

「私にはそれだけのものがあるのだ」

「随分言う奴だな」

「こいつ馬鹿か？」

「いや、何かおかしいんじゃないのか」

「大物か？」

「器が大きいのか、まさか」

「少なくとも私は大器だ」

このことを自分から大いに言うカエサルだった。

「それが私なのだ」

「何処まで言うんだ、一体」

「しかしそれだけの身代金を要求できるんならな」

「そうだな。他の奴等はいいな」

「ああ、放してやるか」

船にはカエサル以外の人間もいる。しかし海賊達は彼等についてはいいとしたのだった。

「別にいいな」

「それだけあればもうな」

「船の金も入れてな」

「それじゃあな」

「人質は手前だけでいい」

こう決めたのだった。そうしてだった。

他の者からは金を取るだけで放してだ。船も取らなかつた。カエサルだけを人質に取りだった。海賊達は身代金が届くのを待つのだつた。

しかしであつた。彼等のそのアジトでだった。

カエサルはだ。常に胸を張ってこう主張するのだった。

「もっと美味しいパンと酒をくれ」

「おい、図々しい奴だな」

「それが人質の言うことか」

海賊達はそのカエサルに対して呆れながら返した。

「御前人質なんだぞ」

「もっと大人しくしろ」

「全くだ」

「何を言うか」

カエサルの言葉だった。

「私は五十タレントウムの男だぞ」

「そうだったな、二十タレントウムをそこまで吊り上げさせてな」

「二十タレントウムってローマじゃ一個軍団養えないか？」

「それって相当な値段なんだが」

「さらに二倍半に吊り上げるって」

「言い過ぎだろ」

「言い過ぎな筈があるか」

だがカエサルは胸を張って言うのだった。

「私を誰だと思っている」

「名前は聞いたよ。カエサルだろ」

「ローマのカエサルさんな」

「仕事は弁護士だったな」

「そうだ、その私だ」

傲慢なまでに胸を張っての言葉だった。

「わかつたらだ」

「ああ、いいパンとワインだな」

「それだな」

「それに肉だ」

また言う彼だった。

「果物も欲しいな」

「おい、肉もだと!？」

「しかも果物もか」

「そうだ。肉は鶏肉だ」

それを所望だというのである。

「果物はオレンジがいいな。そうだ、オリーブも忘れるな」

「こいつ、何処まで要求するんだ」

「胡椒は我慢しておこう」

当時ローマにおいては胡椒は途方もない贅沢品であった。これは大航海時代まで欧州においてはそのままのことだった。

第三章

「それはな」

「当たり前だ。そんなものあるか」

「俺達みたいなしがない海賊にな」

「或る筈がないだろ」

「むっ、そういえば」

カエサルは海賊達の今の言葉を聞いてだ。周囲を見回した。見れば味とはみすばらしくあまり大した食べ物はおるか武器もなかった。

それを見てだ。カエサルはこうも言うのだった。

「御前達あまりいい暮らしをしていないな」

「そんなの見ればわかるだろ」

「しがない海賊だぜ、所詮な」

「漁師もやつてるからからろうじて食えてるけれどな」

「生きるのだけで精一杯なんだよ」

「そんな有様なんだよ」

「そうなのか」

それを聞いてだった。カエサルは納得した顔にもなった。それだった。

彼等にだ。こう言うのだった。

「それではだが」

「ああ、何だよ」

「それでって」

「まだ何か欲しいっていうのかよ」

「もう海賊を止めたらどうだ」

彼が今度言うのはこのことだった。

「ここは魚も少ない。もつといい場所で漁師でもやれ」

「どっかなあ。あるか？」

「俺達ここに流れ着いたからあまり場所知らないんだよな」

「一応商人でもあるけれどな」
この時代商人と海賊は紙一重だった。すぐ変わるものだった。
「まあそれでもだよ」
「ここはな、船も少ないし魚も少ない」
「いい場所じゃないのはわかってるさ」
「それでもなんだよ」
こうぼやくことしきりだった。
「まあそれだけの身代金出してくれるんならな」
「海賊から足洗ってそれでどっかで漁師やれるな」
「エジプトで商売でもするか？」
「アレクサンドリアなんかいいな」
「そっちの方がいいな」
カエサルは割かし親身に彼等に話すようになっていた。
「御前達は海賊には向かない」
「向かなくても生きていかないといけないしな」
「そうだよな」
「食わないとな」
「その辺りが難しいな。まあとにかくだ」
カエサルはここで話を戻してきた。
「いいか？パンをワインだ」
「それと鶏肉とオレンジな」
「オリーブもだな」
「そうだ、すぐに持って来い」
腕を組んで威張つての言葉だった。
「わかったな」
「わかったわかった」
「宴の時に用意してたのをな」
「持って来るからな」

こう話してであった。カエサルは人質となりながらも美食を楽しんでいた。しかもアジトの中を堂々と歩き回る。船も見ることだった。

そしてだ。船についても言う。

「酷い船だな」

「だから金がないんだよ」

「それも全くな」

「だからこのオンボロをだよ」

「使ってるんだよ」

「この船だと嵐に遭ったらひとたまりもないな」

朽ちるものさえ見せているその船を見てだった。カエサルは言うのだった。

「終わりだぞ。それで」

「だからそれはわかってるんだよ」

「俺達が一番な」

「それでもどうしようもないか」

「金がないからな」

「それ言っただろ」

またそのことを話す海賊達だった。

「全く。生きるのも大変だよ」

「そうだよな」

「それはそうだな」

このことはカエサルもよくわかることだった。実際に話にも出す。

第四章

「私も何かと苦労している」

「あまりそうは見えないけれどな」

「そうだよな」

「全然な」

海賊達はカエサルの今の言葉は信じようとしなかった。

「滅茶苦茶偉そうだしな」

「こんな偉そうな奴見たことないよな」

「だよな。それで苦労してるってのか」

「嘘だろ」

「いや、実際に苦労しているぞ」

カエサルは胸を張ってこう主張する。

「これでも何度か殺されそうになった」

「また物騒な話だな」

「そうだよな」

「そんなことがあったのか」

「そうだ。その中を生きてきたのだ」

これは本当のことだった。実際に彼はローマでのその民衆派と元老院派の対立の中にいてだ。何度か殺されそうになっているのだ。

その他にも元老院派に睨まれ何かと困ってきている。ロードスに留学に向かうことにしても彼等から身を隠す為という理由もあるのだ。

それでだった。彼は言うのであった。

「だからだ。苦労はしているぞ」

「まああんたがそう言うんならな」

「それを信じるか」

「そうだよな」

「嘘を言っているようには見えないしな」

「嘘を言っていていい時とよくない時がある」

カエサルは今度はこんなことを言った。

「今は言っていてよくない時だ」

「まあな。本当のことを言っても信じにくい話だしな」

「とりあえず本当にしても凄い話だしな」

「全くだよ」

「そういうことだ。さて」

カエサルは散歩を続けながら言っていく。海賊達の隠れ家を細かいところまで見ながらだ。

そうしてだ。今度はこんなことを言うのだった。

「さて、歩くのも飽きた」

「さっさと寝てろ」

「大人しくしてろ」

「生憎だがじつとしていているのは性には合わない」

また海賊達の言葉を聞こうとしない彼だった。

「魅力的な女性と遊ぶか書でもあれば別だが」

「悪いがどっちもないぞ」

「それはどうしてもな」

「わかっている。だからだ」

両方共ないと告げられても全く悪びれずにだ。また言うのだった。

「それではだが」

「今度は何だ」

「一体何が欲しいんだ」

「この場合は何をしたいかだな」

平然と彼等に言い返してだった。

「そうなるな」

「本当にああ言えばこう言うだな」

「次から次によくもまあ」

「とにかく。それでだ」

「何をしたいんだよ」

「稽古でもするか」

海賊達の粗末な剣や斧やらを見ての言葉だった。

「動いていないとなまってしまっからな」

「ああ、そうかよ」

「それじゃあな」

「今度はそれだな」

彼等も嫌々ながら頷いてだ。そうしてだった。

カエサルは今度は彼等と剣や槍やそういったものの稽古をしたのだった。そうしたことをしながら時間を潰してだった。

身代金が届いた。海賊達はそれを受け取ってカエサルを解放する時になってやれやれといった顔を見せるのであった。

「これでお別れだな」

「ああ、二度と来るなよ」

「何があってもな」

「ははは、それは安心しろ」

カエサルはうんざりとした彼等に笑って話した。

「私はまた来る」

「だから来るなつての」

「もうあんたとは会いたくないからな」

「会っても捕まえたりしないからな」

「関わりになりたくないんだよ」

「まあまた会おう」

しかしカエサルはまだ言うのだった。

第五章

「御前達のこととはわかったからな」

「何がわかったんだよ、それで」

「意味がわからないんだけれどな」

「まあ気にするな。それではな」

こうしてだった。彼は迎えの船に乗り一旦は海賊達の場所から去った。すかしすぐにだった

軍を集めて自ら指揮してだ。その海賊達のアジトに攻撃を仕掛けたのだ。

隠れ家の隅から隅まで見回っていたので何処をどう攻めればいいのかわかっていた。大軍で不意を衝いて一気にであった。海賊達は為す術もなく全員捕まったのだった。

カエサルは縄に括られ座らせられた彼等の前に立ってだ。胸を張って言うのだった。

「また会ったな」

「何でこうなるんだよ」

「今度は俺達が捕まったのかよ」

「何でなんだよ」

海賊達はその勝ち誇る彼を前にしてばやくことしきりだった。

「で、俺達捕まったけれどな」

「それでどうなるんだよ」

「一体な」

「あれか？やっぱり」

ここで海賊の一人が言った。

「海賊だから縛り首か」

「つてことは俺達全員か」

「そうなるのか」

「そうなりたいのか？」

カエサルはその彼等にこう返してきた。
「もつとも表立つてはそういうことになるかな」
「表立つてはってどうということだよ」
「そうしないっていうのかよ」
「縛り首じゃないのかよ」
「御前達がそうなりたいのならそうするが」
カエサルはいぶかしむ彼等にこう返した。
「どうだ、それは。私はそれでも構わないが」
「馬鹿を言えよ」
「誰が自分から死にたいなんて言うかよ」
「俺達は少なくともそこまで絶望しじゃないぜ」
「まだ生きたいさ」
「ならだ」
彼等の言葉を聞いてからまた言うカエサルだった。
「生きるのだな」
「生き残って何しろっていうんだよ」
「それで」
「まあ海賊は止める」
これは絶対だというのだった。
「御前達はそれには向かない。海賊になるには妙に善人過ぎる」
「だから食う為にやってんだよ」
「幾ら何でも人なんか殺すか」
「そこまで腐っちゃいねえよ」
「だからだ。まあ身代金は返してもらつ」
それはだというのだ。実はそれ以外にこれといって貯め込んでいるものはない貧乏海賊なのである。
「それでだ。まあどこかで漁師なり商人なりして暮らせ」
「って言われてもな」
「そうだよな」
「俺達何処で暮らせばいいのやら」

「ここ以外にな」
「そもそもだよ」
「ここで彼等はこうも言うのだった。
「どっかに移る金もないしな」
「船は没収だろ？」
「俺達のあの船も」
「あんなものもう乗れないぞ」
カエサルはその彼等に話す。
「何時沈んでもおかしくない船だろ」
「それはそうだけれどな」
「けれどあんな船でも一隻しかないしな」
「だよな。それがないと」
「俺達何処にも移れないぞ」
「船はある」
彼等にまた話すカエサルだった。
「ちゃんとな」
「あるつて。どんな船がだよ」
「そんなのないだろ」
「なあ」
「ちよつとな」
「それはな」
「いや、船はある」
まだこう言うカエサルだった。

第六章

「ちゃんとこっちに持って来たからな」

「えっ、持って来たって」

「船をかい？」

「まさかと思うけれどな」

「それは」

「そうだ。見るのだ」

カエサルはこう言って海の方を指し示す。するとだ。

そこに見事な船があった。海賊達がこれまで乗ったことのないま
でのだ。そうした見事な船がだ。そこにあったのである。

「あれを御前達にやろう」

「何と」

「あんな立派な船をか」

「俺達にか」

「そうだ、そしてだ」

そうしてだった。カエサルはさらに話すのだった。

「当面の生きる為の金も用意した」

「それも俺達についていうのかい」

「くれるのか」

「海賊にか」

「それで海賊から手を洗って漁師でも商人でも何でもなるといい」

またこう言うカエサルだった。

「アレクサンドリアでも何処でも行ってな」

「わかった。ではな」

「そうさせてもらう」

「信じられないが」

「御前達が根っからの悪人ならここで処刑していた」

カエサルは笑いながら今度はこんなことを言ってきた。

「しかし御前達はそうではないからな」
「だからか」
「それでだというんだな」
「俺達にここまでしてくれるのは」
「そういうことだ。では海賊から足を洗って真面目に暮らすようにな」
「わかった」
「じゃあそうさせてもらうな」
海賊達もカエサルその言葉に頷く。しかしだった。
ここでだ。彼等は不意にこう思っのだった。
「しかしな。当面の金といい」
「用意してくれた船もな」
「それにこれだけの軍も連れて来たしな」
「金はどうしたんだ？」
彼等は今度はこのことについて考えだした。
「一体全体どうして」
「どうしてこれだけの金を用意できたんだ」
「あんた金持ちらしいが」
「それでか？」
「ああ、それはな」
カエサルはしれっとした調子でこう答えたのだった。
「借りた」
「借りた!？」
「借りたって!？」
「どういうことだよ、それって」
「何なんだよ」
「借金だ」
それだとだ。平気な顔で答えたのだった。
「全部借金だ。金はいつもそうして作っている」
「何っ、これだけのことを全部借金でか」

「あんた正気か!？」

「これだけのことを全部借金でやるなんて」

「どういうつもりなんだ」

「何かおかしいか？」

海賊達その言葉にだ。何でもないといった顔で返すカエサルだつた。

「金は借りる為にあるだろう。違うのか」

「いやいや、軍に船って」

「どれも尋常なもんじゃないだろ」

「それを全部借金でするって」

「どんだけの額になるんだよ」

「いいではないか。借金も財産だ」

カエサルは本当に何も思っていない。むしろ誇りにさえ思っているふしがあつた。

「そういうことでな」

「恐ろしい男だ」

「そうだよな。こいつ、まさか」

「かなりの大物なんじゃないのか？」

「やつとわかつたか」

その大物という言葉にすぐ反応するカエサルだった。

満面の笑みになってだ。彼は言うのだった。

「私は必ず大きなことをするからな。何処かで真面目に生きてその有様を見ているのだ」

「何か俺達が会っている奴ってな」

「だよな。少なくともな」

「普通の奴じゃないな」

「それはわかつたよ」

「では達者でな」

唸るしかできなくなった彼等にだ。カエサルは明るい声をかける。「機会があればまた会おう」

「ああ、じゃあな」

「縁があればまたな」

「会おうな」

海賊達も結局は笑顔になってカエサルに返す。彼等もそんな彼に對して妙に魅力を感じているのも事実だったのだ。

カエサルの若き日の話である。この海賊達は俗には処刑されたことになっている。だがこの後どうやらアレクサンドリアに移りそこで商人をしていたらしい。そこに戦でやってきたカエサルと再会してだ。本当に大物になった彼に妙に納得したという。カエサルにまつわる多くの話の一つである。

カエサルと海賊 完

2010・12・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6029q/>

カエサルと海賊

2011年2月2日22時51分発行